

ミンダナオの風

発行：ミンダナオ子ども図書館 編集：松居友
2019年12月・クリスマス74号



ミンダナオ子ども図書館の敷地内には300人ほどの極貧家庭の先住民、イスラム、クリスチャンの奨学生たちの中から、孤児や崩壊家庭や虐待と言った理由で保護を必要とする子どもたちが、80人ほどいっしょに暮らしています。山と海の下宿小屋で暮らし、通学している極貧の子たちを含めると、200人ほどの衣食住や教材費や学費を保証！毎日のようにスタックが、広大な地域を巡り、皆様からのご寄付で、養っています！日本ではちょっと想像できない心理的肉体的なダメージを受けてきた子どもたちだけども、日本から訪れる若者たちや中高年の方々が、驚かれるのは、その明るさと生きる力！

「わたしたち、宗教や民族が違ってもみな兄弟姉妹で一つの家族！ここにいとと幸せ！ここは、我が家なの！

大切なのは、友情と愛！」朝四時半に起きてのご飯づくりから掃除洗濯、そして花壇や畑作りまで、

子どもたちが、楽しそうにやってくれる。ときには、木に登って果実をとって

みんなで分けて、食べさせてくれたり！読み語りや避難民救済も、積極的にやる子どもたち

そうした子どもたちに出会って過ぎて、日本から来た若者たちが、必ず言う言葉。

「ここは、僕の我が家だよ。

もう、日本に帰ってもだいじょうぶ。

辛いときでも、ここに来れば夢がもてるし、気持ちか癒やされ、元気になれる！」

これからMCLの農業プロジェクト

宮木 梓

一日三食食べることが難しい村から出てきたような子どもたちも、「MCLでは三食お腹いっぱいお米が食べられる」ことに感動します。お米を自給できていれば、お金が足りなくても、少なくとも子どもたちに、お腹いっぱいご飯を食べてもらうことができます。食糧の自給を進めていきたいMCLですが、子どもたち、スタッフが長い間叶えたいことがあります。それは、MCLの中に、精米機を設置することです。



精米機と、精米機を置く場所に屋根をつけるのを全て合わせて、35万円（約73万円）で設置することができそうです。将来のことを考えると、MCLの中で精米ができるようになることが本間に助かります。

また、精米したときに出る籾殻と米ぬかを、家庭菜園の肥料に使うことができます。籾殻燻炭を作って土に働きこめば、微生物の棲み処になります。

もし、MCLに精米機を設置することに協力をお願いできれば、振込用紙の通信欄に「精米機」と書いてご支援を送っていただけましたら、とてもありがたいです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

また、マロンゴンの下宿小屋の近くに、約10ヘクタールの土地があります。ここに、換金作物であるコーヒー、カカオ豆、ヤシの木を植え、収入を得られるようにする計画です。

植林は、雨季の8月から10月頃の、土が水をよく含んだ頃に行います。夏休みを利用してMCLに来て下さる訪問者の皆様にも、ぜひ植林作業に参加していただけたらうれしいです。

これからMCLを考える 農業で自立していくこと

MCLに住む子どもたちは、今年度も例年にも増して家庭菜園に力を入れています。畑には、オクラやトマト、生姜やカモテトトプス（サツマイモの一種らしいが、葉を食べる）、ペッチャイ（小松菜のような野菜）、ニガウリなどが植えられています。

それぞれの子どもたちが少しずつ畑を割り当てられて、自分で好きな作物を植え、収穫があったら売って、学用品や石けんなどを買うお小遣いの足しにするそうです。まだ畑の土が痩せているので、たくさん収穫がないかもしれないませんが、今後が楽しみです。



MCLの食堂のおかずで自給できているのは、今はレモングラスとカモテトトプスくらいですが、将来はキダパワンの八百屋さんで野菜を買わなくていいくらいの収穫があればいいな、と思います。

MCLでは、現在マキララとアップーロハス、ロウワローロハスの三カ所に、合計で約15ヘクタールの水田を所有しており、キダパワンのMCL本部に住む子どもたちとスタッフ、下宿小屋に住む子どもたちの食べるお米を自給しています（時々足りなくなることがあり、市場で買うこともあります）。

MCLは、ほとんど、日本の一人ひとりの支援者の方々から送っていただいている寄付で活動することができて



畑仕事をするのは、子どもたち

ミンダナオ子ども図書館に関する情報、2006年からの日々の活動報告など詳しくはウェブサイトのホームページを参照されると、より深くわかります。

検索：「ミンダナオ子ども図書館だより」
検索：「ミンダナオ子ども図書館：日記」



ご飯のおこげもおいしいよ！

います。皆様が日本円で送って下さった寄付を、MCLの日本事務局が毎月フィリピンに送金し、円をペソに換金して活動資金にしています。ですから、数年前のように、円のレートがペソに対して悪化すれば、奨学生のお小遣いを少しづつ減らしたり、学生総会に参加する奨学生を大学生のみにして対応しています。しかし、子どもたちが毎日食べるお米は、お金が足りないからといって減らすことはできません。

一日三食食べるのが難しい村から出てきたような子どもたちも、「MCLでは三食お腹いっぱいお米が食べられる」ことに感動します。MCLでお米を自給できていれば、お金が足りなくても、少なくとも子どもたちに、お腹いっぱいご飯を食べてもらうことができます。



ミンダナオ子ども図書館の田んぼ

また、フィリピンは、高度経済成長の只中にあるのでしょうか、インフレーションが激しく、お米も、私がネグロス島にいた十数年前は1キロ20ペソちょっとで売っていましたが、今は1キロ40ペソから50ペソもします。自分たちでお米を育てていれば、インフレに影響されず、お米を得られます。MCLでは、今年新たに寄付で5ヘクタールの灌漑設備のついた水田を購入する予定です。MCLのみんで食べる以上の収穫があればお米を売って、そこから少しでもおかず代を賄いたいと考えています。

また、マロンゴンの下宿小屋の近くに、約10ヘクタールの土地がありま



皆で助けあい分かち合う

す。ここに、換金作物であるコーヒー、カカオ豆、ヤシの木を植え、収入を得られるようにする計画です。

MCLの子どもたちの食べる鶏肉や魚代は寄付からでなく、MCLの畑からの収入から出せるようになれば、活動資金の少ない月でも、子どもたちにお腹いっぱい食べてもらうことについては、安心できるからです。コーヒーやカカオ豆の苗木は、MCLで種から育てます。すでに、植林環境支援のためにコーヒーの苗木を毎年3000本以上育てており、その苗木をマロンゴンの山にも植林して行く予定です。苗木作りを担当しているのはスタッフのレイさん一人ですが、MCLに住む子



植林の苗木も種から育てている

どもたちがポットに土を入れるのを手伝っています。みんなで作ればあっという間です。

苗木が育てば、週末にマロンゴンの下宿小屋に泊まりながら、奨学生や日本からの訪問者の方も参加して、植えていく予定です。植林は、雨季の8月から10月頃の、土が水をよく含んだ頃に行います。夏休みを利用してMCLに来て下さる訪問者の皆様にも、ぜひ植林作業に参加していただけたらうれしいです。

私は、もともと農業がたくて、フィリピンのネグロス島の有畜複合農業をしている農場に通い始めました。だから、MCLのこれからの農業プロジェクトにワクワクしています。私も、

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、成績よりも孤児や片親、母子家庭の子、親がいても学校にいけない子を採用基準とし、大学まで通えます。その中の特に何らかの事情で保護を必要としている子は本部に住み、生活を保障。学費の他に、医療費、制服、学用品、小遣い、寮下宿代、生活費等が入っています。



お米を干すのも子どもたち

MCLの子どもたちのように、畑の空いたところに、トウモロコシやモンゴ豆、落花生を植えました。これらは、畑を耕さず、畝を立てなくても、土に穴を開けて直接植えていけるし、土が痩せていても育ちやすいからです。山の先住民の人たちも、トウモロコシを植えるときは、藪を払って火を入れ、棒で土を突いて穴を開けてトウモロコシを植えていきます。マノボ族のダンスを思い出します。食糧の自給を進めていきたいMCLですが、子どもたち、スタッフが長い間叶えたいことがあります。それは、MCLの中に精米機を設置することです。



200人分のお米を自給している

MCLでは、お米を取穫すると、田んぼの脇で脱穀し、初付きのお米をMCL本部に運んで、普段は子どもたちのバスケットボールコートになっているところで天日干しをしています。精米は外部でしています。精米のたびに、お米をトラックのエルフに積んで、マキララの精米所まで行くので、その度に費用がかかります。MCLの中に精米機があれば、エンジンを動かすためのガソリン代はかかりますが、精米代費はかからず、わざわざマキララまでお米を運ぶ必要もなくなります。また、精米したときに出る籾殻と米ぬかを、家庭菜園の肥料に使うことができます。籾殻燻炭を作って土に働きこめば、微生物の棲み処になります。



わたし、スイカ植えたのよ

MCLには、以前ヤギがいたこともあったのですが、盗まれてしまったそう、今は家畜がいないので、有機肥料は残飯を米ぬかで発酵させたり、ミミズコンポストを作りたいと考えています。私がネグロスの農場にいた頃は、豚を飼って、糞尿をバイオガスにしたり、肥料にしてみました。MCLはムスリムの子どもたちがいるので、豚は飼えません。スタッフが飼っている鶏は、放し飼いで好きなところを走り回っているの、鶏糞も集められません。精米機がMCLにあれば、MCLの畑の土もよくなるのになあ、といつも思うのです。



よろしくお願いします。

農場担当のレイさんの見積もりですと、精米機と、精米機を置く場所に屋根をつけるのを全て合わせて、35万円(約73万円)で設置することができます。MCLの中で精米ができるようになると本当に助かります。MCLの子どもたちも、学校卒業後は、いい仕事に就いてたくさんのお給料をもらうことが成功で、豊かになることだと考えがちですが、食糧を自分で生産できる豊かさを感じてもらえたら、と思います。いつもお願いばかりで大変心苦しいのですが、もし、MCLに精米機を設置することに協力をお願いできる方がおられましたら、振込用紙の通信欄に「精米機」と書いてご支援を送っていただけましたら、とてもありがたいです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

自由寄付は、一番根幹になる寄付です。

貧困集落に住んでいる子供たちの薬から手術に至るまでの医療費。保護を必要として、MCL本部や下宿小屋に住み込んで学校に行かせている200名ほどの奨学生の生活費。ガソリン代を含む活動全般の諸経費等々。機関誌を楽しみにしている方の場合は、わずかな寄付でもお送りします。他の方々に紹介していただければ幸いです。

若い世代の感性が見たミンダナオと日本



僕が、この孤児の子の支援者になる

ミンダナオ島での

滞在を終えて

西澤 諒

私は8月5日から約一か月間、ミンダナオ島のMCLに、二回目となる滞在をした。

1回目の訪問では4日間しか滞在できず観光気分が終わってしまった。短い期間であったため、ミンダナオ島の生活や、実情について深く知ることができなかったし、MCLの子もたちと

もっと一緒にすごしたく感じた。また一回目の滞在があまりにも心地よかったので、またMCLに戻りたいという理由から、今回の滞在を決めた。

ミンダナオ島はルソン島に次いで二番目に大きく、南部に位置する島だ。

日本からの直行便はまだなく、今回は私は、マニラからの乗り換えでミンダナオ島に来た。

フランテーションによる大規模農業が盛んで、広大な土地にバナナの木が規則正しく並んでいるのを滞在中に何度も見た。その一部が、日本にも輸出されているという。また現フィリピン大統領であるドゥテルテ氏が、育った場所としても知られる。

実際にミンダナオ島に足を運ぶまで、私はミンダナオ島という島があるなんて知らなかったし、知っていたとしても気にも留めなかっただろう。しかし、ミンダナオ島滞在を経験することによって、実はミンダナオ島と日本との間には、深い関係があり、今後の日本を考えていくうえで重要であることが分かった。

今回は私が一か月間の滞在を通して経験したり、感じたことについて書いていこうと思う。

めちゃくちゃ焼けるよ

ミンダナオ

ミンダナオ島に来て思うのが、日本との天候の差についてだ。ミンダナオ島は、やはり熱帯に位置するだけあつ

て非常に暑い。

けれども私は、日本の暑さの方が、湿度が高くて辛いなと感じた。それに比べるとミンダナオ島の気候は、暑いだけだったので平気だったのだが、日本との差はなんといつても日射量だ。ミンダナオ島は、赤道の近くに位置している。そのため日本と比べると、とても眩しい。

現地では移動の際、ピックアップトラックの荷台に乗ることが多かったのだが、滞在日数が増えるにつれ、どんどん肌が黒みを帯びていき、最終的には現地の子供に「あなたの肌はフィリピン人よりも黒いね」なんて言われるようになってしまった(笑)

思えば現地日本人スタッフの宮本梓さんは、肌が焼けないように移動の際は、常に日焼け対策をしていた。一方私は、常に半袖半ズボンという格好だった。焼けるのは必然だったのかもしれないが、フィリピンは日射量が多いので、MCLへの訪問をお考えで、日焼けしたくない方は、日焼け対策をしっかりしよう。

日本人とミンダナオ島の関係

海外に行くと日本人の口に合わないような料理が出てくることがあるが、私の滞在中、そのように感じることはなかった。

MCLで子供と一緒に食べるご飯は



ダバオから車で走って3時間



川で洗濯して日銭を稼ぐの

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、成績よりも孤児や片親、母子家庭の子、親がいても学校にいけない子を採用基準とし、大学まで通えます。その中の特に何らかの事情で保護を必要としている子は本部に住み、生活を保障。学費の他に、医療費、制服、学用品、小遣い、寮下宿代、生活費等が入っています。

若い世代の感性が見たミンダナオと日本



この山の下谷底まで行くんだね

もちろん美味しいが、外出時に地元の食堂で食べるご飯もどれも美味しかった。これを松居友さんに伝えると、ミンダナオ島の料理は日本の影響を受けているものもあるからだ、と教えてくれた。確かに「MOL」のご飯には、ゴージャスなプルーンが出てきたり、市場では塩辛や魚の干物があつたりと、日本の食文化に近いものがあった。しかし、私はそれを聞いた時、なぜ日本の影響を受けているのかわからなかった。なぜミンダナオ島と日本とで、こんなにも食文化が似ているのだろう。疑問に思ったので、友さんに聞いてみる。

世界史の教科書で、日本がアジア諸地域を占領していたのは知っていたが、ミンダナオ島でも進軍があり、情

てみると、日本で暮らすだけでは知りえなかった事実を、沢山聞くことができた。ミンダナオ島にはかつて日本人が多く移住し、日本人街があったという。その名残で、日本人に近い食文化が発達した。また今でも日系人の学校があつたり、実際に私の滞在中に出会った地元の子どもの中には、顔立ちが日本人に似ていたり、名前の中に日本語が入っていたりと、かつては日本人とミンダナオ島の人々との間に活発な交流があつた頃がわかる。

しかし、残念ながら、日本とミンダナオ島との間には、平和的關係だけがあつたわけではない。私も滞在するまではしらなかったのだが、フィリピンミンダナオ島には、かつて戦時中に日本軍が進軍したのだという。

また先住民の話から、進軍した日本兵が、敗戦の色が見え始めジャングルに逃げこんだ時には、裏切りを恐れて先住民を生き埋めにした事もあつた、という話を聞いた。日本がミンダナオ島に進軍した事実すら知らなかった私にとって、その事実はとても衝撃だった。

報隠蔽のために生き埋めにしていたことは知らなかった。実は今回の訪問で、日本軍が戦時中に逃げ込んだと言われている洞窟へ行く機会があつた。その時の体験について書きたいと思う。



洞窟を抜けて

洞窟内は外とは違い、空気がひんやりとしていた。また水滴が時折天井から垂れてきて、より一層気味悪さを助長した。洞窟の奥深くに入っていくに

先祖の霊にタビタビボ
私は今回アラカンという地域にある洞窟へ行く機会を得た。アラカンはMOLのあるキダパワン市から車で約三時間の位置にあり、マノボ族の集落がある。
アラカンは山の上であり、行くには舗装のされていない、険しく岩のゴロゴロ転がった道を通らなければならなかった。揺れるたびに荷台が揺れて、決して快適なドライブとは言えなかった。しかし山を登る過程で、そこにはかない花や、全長40mはある巨大な木など珍しい物をたくさん見ることができた。またなんと山頂付近から見た広大なミンダナオの土地とアポ山の雄大さに心を打たれた。険しくも新鮮なドライブを経て、アラカンに到着した。到着すると同時に、徒歩で洞窟へ向かうこととなった。洞窟に行くにあたり、現地のマノボ族の男性2人と男の子が、案内してくれることとなった。

出発する前には分からなかったが、洞窟に行くまでの道がとても大変だったが、洞窟に行くまでに山道を通つたのだが、フィリピン特有の暑さに加え、体の水分がとんでいきそうなほどの日光量で倒れそうだった。(笑)そんな私を横目に、一緒についてきた男の子は、滑りやすい山道を走りながら下って行った。その後、ジャングルに入り、ぬかるんだ道を進んでいった。

ジャングルを30分程度歩いた後、生い茂る緑の中に、突如として大きな黒い穴が見えてきた。生で洞窟を見るのは初めてだったので、中に何がいるのかわからない恐れから恐怖を感じた。洞窟へ入るとともにキーキーというコウモリの鳴き声が聞こえ、姿は見えなかったが、はばたく音が洞窟中に響いた。

(銀行振込、ネットバンキングも可能です)

■銀行名 ゆうちょ銀行 ■金融機関コード 9900

■店番 019 ■預金種目 当座 ■店名 〇一九店(ゼロイチキユウ店)

■口座番号 0018057

若い世代の感性が見たミンダナオと日本



この下に鍾乳洞があるけど、誰も入らない

つれて、外からの光が届かなくなり、ついにライトなしには歩けなくなりました。足元が見えない私を見かねてか、先ほどの男の子が、ライターで足元を照らしてくれた。

光の届かない洞窟を20分くらい歩いて、ようやく小さな光が見えてきて、洞窟の反対側に到着した。入った時にはわからなかったが、天井を見上げると、何百ものコウモリが天井にぶら下がっていて、上を見なければよかったですと後悔した。

出口につくと、松居友さんが出口付近にある、鍾乳洞の入り口を指さして教えてくれた「あれは戦争中に日本兵が潜んでいた穴で、自決した人が今も眠っているところだよ」と。

私はその言葉に衝撃を受けた。今まで通ってきた道は、不衛生で暗く、とても人が生活できる場所ではなかったし、2019年になった今でも調査されず、ミンダナオ島に眠っているからだ。なぜ調査がされないのかというと、やはり長く続いたフィリピン国内の紛争や、今も続くISとの戦闘などで調査隊などが来れない状態にあるという。

普段戦争のことなど考えもしなかった私にとって、初めて「日本は戦争をしていたんだ」という気持ちにさせられた。それと同時に、国のために命をかけた彼らに対して、感謝の気持ちがあった。穴の前まで行き手を合わせた。

すると友さんが「タビタビポ」と言っているのが聞こえた。タビタビポというのは、現地マノボ族の言葉で「お邪魔させていただきました」という意味らしい。マノボ族には日本とおなじように祖先の霊を信じる文化があり、そのため現地の人はオバケが出るという、あまりこの洞窟には近づかないという。私も洞窟からの出た後洞窟に向かって「タビタビポ」とつぶやいた。

戦争を伝える必要性

今回、幸いにも私は、かつての戦争の生の現場を訪れ、戦争に対して考える機会を得ることができたが、若い世

代の中には戦争に対して考える機会が減ってきている人がいると思う。時間が進むとともに、当時生きていた人が亡くなり、戦争の残酷さや悲惨さについて、語る人がいなくなっているという現実がある。また戦争がテーマのゲームが普及し「戦争＝遊び」というイメージがついてしまっている、という面も否定できない。

そういった現状のなか、今回のミンダナオ島滞在は、戦争に対して考える機会を与えてくれた。今後二度と洞窟の中で出会った日本兵のような犠牲者を出さないように、戦争の悲惨さを何らかの形で、世代に残す必要があると感じた。いつの日かミンダナオ島の情勢が安定し、洞窟の中の日本兵が、日本に帰国できることを切に願う。



また、いつでも、もどっておいで！

ミンダナオ島の滞在を通して

ミンダナオ島の滞在を通して感じたのが、もっと多くの人に、ミンダナオ島に来てほしいということだ。

ミンダナオ島は紛争が昔からあり、今もISとの戦闘が、つづいている地域もあることは確かに事実だ。私も初めてミンダナオ島に来る前は、不安で仕方なかった。でも日本にいて、スマホを見ているだけでは知ることのできないことが、たくさんあるのは事実だ。

また、今回私が体験したように、日本にとってこの先、何が必要なのかということについて、自分なりに考え、意見を持つこともできる。

何よりMCLの子どもたちの笑顔を見ることがよって、訪問した私たちが日本を抱える、悩みやストレスなどから解放される。もっと多くの人に、MCLに訪問してもらうことによって、日本の良いところ、逆に悪いところを客観視し、日本の世界における立ち位置を、今後どうしていくかについて、考える良い機会になる。

何事も経験だとよく言うが、MCLへの訪問は、とても貴重な体験であると断言できる。次の訪問で3度目になるが、ぜひまたミンダナオ島を訪問したい。

7 奨学生の紹介、来日公演や講演の質問、現地訪問、機関誌停止その他に関するお問い合わせは、

メール mclmindanao@gmail.com
現地日本人スタッフ：宮木梓（あずさ）
FAX： 0743 74 6465 日本事務局 前田容子

若い世代の感性が見たミンダナオと日本

ミンダナオの旅日記(7)

高田真奈美



喜びもかなしみも、自然と分け合っているのは、アジア人の良いところだ。

限界はもうきていて、東京の空気は、人々のストレスや怒りやかなしみでピリピリしびれるくらいだ。
個人でやるより、みんなで行けるこのほうが、遥かに強くて大きい。戦後、日本はそれで、世界が驚くような復活を遂げたのではないか。この可能性についてもっと考えられないか。
喜びもかなしみも、自然と分け合っているのは、アジア人の良いところだ。



自我など宙に漂っていいのいいのだ。

今ある文化、習慣から一旦脱出してみて、驚くほど軽いきもちになった。この一カ月の思い出は、ずっと忘れないだろうし、今後の生き方に影響を与えるだろう。
今までどれだけ自分の手入れ、自分をどう見せるかに、注力してきたかわかった。
個性的であることなど必要ない。
ヒトは生まれた時から、十分魅力的なんだ。
そんなものは超えていこう。
自我など宙に漂っていいのいいのだ。



他人よりも優れようと思う点があるなら、その力で他人のその終わっていない仕事を手伝おう。
自分の小ささを認めてしまおう。私が一人でできることなんて少ない。
モテたい、可愛くなりたい。。。
そんな気持ちが膨らみすぎて、お金かけ過ぎたり、心労を抱えすぎているか、考えてみていいかもしれない。
いっそ、その素敵な服は物質的な貧しさを抱える人に送ってしまおう。
スッキリするし、本当に喜ばれるぞ！笑

心につける羽は
「個性的であろうとすること、人より優れようと考えること」を超えたところにある。。。たぶん。
ミンダナオ島の生活もあと少し。もうすぐ旅は終わる。(終わり)



彩流社から発刊



今人社から発刊されている絵本



松居友執筆のミンダナオを舞台にした本です。

奨学生の紹介、来日公演や講演の質問、現地訪問、機関誌停止その他に関するお問い合わせは、

メール mclmindanao@gmail.com
 現地日本人スタッフ：宮木梓 (あずさ)
 FAX: 0743 74 6465 日本事務局 前田容子

わたしの人生体験記(連載)

松居 エープリルリン

わたしは、隣に住んでいる友だちといっしょに、楽しく話しながら家に向かった。

彼女はエネルギーに満ちていて、何があっても、どんなに困難な状況に落ちいても、肯定的に物事を考えて、乗り越えていく子だった。わたしはそんな彼女が、大好きだった。

「そんなことがあっても、先に進む道が、どこかにあればいいじゃないか！」



いつも、彼女はそう言っていた。

「ほんとね！そのとおりだよね！」

生きていく道は、たくさんあるわけだから、その中から道の一つ見いだせれば、それでいいんだよ！」

わたしは、そう答えると、彼女といっしょに笑った。

気がつくのと、ちょうど五時半に家の近くにきていた。

「じゃあね！わたし、こっちへ行くから！」そう別れの言葉をいうと、

「オーケー！バイバイ、またね！」と彼女は答えた。

お互いに手をふって挨拶をかわしあうと、わたしは叔母の家のある右に向かい、彼女はお母さんがやっている雑貨屋のお手伝いをしに、左にむかった。

夕飯の支度をしなければならなかった。わたしは、急いだ。でも家のそばまで来ると、なにやらおいしそうな臭いがしてきた。タマネギとシヨウガ、醤油とお酢、そして、月桂樹の葉の甘い良い香りがしてきた。



おいしい食べ物の臭いがかぐと、空腹を感じて、わたしのお腹がゴロゴロ鳴り出した。

「ニワトリのアドボ煮込みに違いはないわ！」

そうつぶやくと、わたしは家の中にはいった。すると、叔父が裏の台所に立って、材料をまぜるための、ココナツの殻と竹でつくったシャモジを持って、お料理をしていた。

「たたいま、おじさん！」

わたしはそう言うとおじさんの手をわたしの額に当てて、年長者への敬意をあらわした。わたしたちはこの習慣を、「祝禱(しゅくとう)」と呼んでいる。

「神の祝福があるように！」叔父は、そう答えて、わたしに祝禱を授けてくれた。



「オーケー！着替えておいで。そしたら、野原の山羊を捕まえて、水をあたえておやり。水のなかにちよっとだけお塩をいれてね。」

「はい、わかりましたおじさん！」わたしは、答えた。

わたしは、制服を着替えると、いそいで裏庭に山羊を捕まえにいって、

わたしは、山羊をオリにいれると、水をあたえた。そしてオリのまわりを掃除してから家にもどった。

わたしが家につくと、おばさんといっしょに叔母の子どもたちがみんな帰っていたので、わたしは、裏の台所に行くとき手を洗い、叔父が料理に使った食器道具を洗った。

六時半をすぎて、叔父の料理をテーブルに並べ終わった。

「よし！食事の準備ができあがった。さあ、食べよう！」

叔父がそう言うのと、皆テーブルにやってきて、腰をおろした。↓続く



ミンダナオ子ども図書館に関する情報、2006年からの日々の活動報告など詳しくはウェブサイトホームページを参照されると、より深くわかります。

検索：「ミンダナオ子ども図書館だより」
検索：「ミンダナオ子ども図書館：日記」

個人支援者のいない私たちの、支援者になってくださいわ！



Hasmaira O. Salaban

(2002年7月3日生) 17歳

マギンダナオ族

マノソル高校5年生 (6年制)

ハイ、私はハスマイラ！

この6月に、実家からキダパワンのMCLの寮に移って、高校に通っています。私の故郷は、イスラム自治区・マギンダナオ州のパガロンガンにある、カルボガンという集落です。トモさんの絵本、『サダムとせかいいちのおきなワニ』の舞台になった村で、日本のODAの草の根支援で、小学校を建てていただきました。

私の母は、私を産んでひと月と10日で、姉2人と赤ちゃんだった私を置いて、家を出ていってしまいました。私たち姉妹3人は父の元に残されましたが、父はプレイボーイで外で恋愛す

るのに忙しかったので、祖母が私にミルクを飲ませて育ててくれました。今は、父も歳を取ったので、落ち着いています。

私は、父の家と祖母の家を行ったり来たりして暮らしていましたが、父が再婚してからは、主に祖母の家で暮らしています。父と新しい母の間には、2人の子どもがいます。父は、ダバオやコタバトで仕事の仕事をしています。仕事が始まると一か月以上家に帰ってきません。新しい家庭ができた後も、私たちにお金を持ってきてくれるので、私たちは一日に3食ご飯を食べることが出来ますが、おかずはティラピアなどの川で採れる魚が多いです。カルボガンは川沿いにあるので、川魚が豊富なんです。

私がカルボガンからMCLに移ったのは、それまで通っていた高校が、歩いて一時間以上かかったからです。私がお家を出てMCLに移ることを決めたのは父でしたが、私はMCLでの暮らしをとて楽しんでいきます。実家にいるよりにぎやかですと楽しいです。

私は、将来は大学で社会福祉か教育を学びたいです。卒業後の夢はまだ漠然としているけれど、海外に出稼ぎに行きたいです。日本か、韓国か、タイで働いてみたいです。かわいい女の子

がたくさんいるから。私はトンボーイだから、彼氏をつくったりするのは興味がない、女の子が好きなんです。でも、イスラム教徒は女性同士で結婚はできないから、結婚にも出産にも興味がありません。

私は、生まれてからほとんど両親と一緒に過ごしたことはなく、壊れた家族で育ちましたが、姉や叔母、祖母もいるし、友達もいるから、自分を不幸だと思いません。マノソル高校で、マノボ族やクリスチャンのクラスメイトと勉強するのも楽しいです。

カルボガンにいたときは、戦闘の度に避難して、避難している間は学校にも行けなかったので勉強も遅れていましたが、今は戦闘の心配なく高校での勉強を楽しむことができます。将来、カルボガンも戦闘がなくなると、村の子どもたちも安心して学校を楽しめたいと思います。

私に、戦闘の不安なく、友達と楽しめる学生生活を過ごす機会を与えてください、どうもありがとうございます。一生懸命勉強したいです。

Benjamin S. Adam

(2002年5月21日生) 17歳

マギンダナオ族

ランガイエン高校4年生 (6年制)



皆さん、こんにちは。

僕は、ベンジャミン。ノースコタバトの西部に位置する、ピキットのランガイエンが僕の故郷です。この6月に、ランガイエン高校の4年生に進級しました。マギンダナオ族で、信仰はイスラム教です。

僕は、9人兄弟の4番目に生まれました。父は農業に従事しています。母は、家で姉妹の世話をしたり、家事をしています。僕がMCLの奨学生になったのは2012年で、小学3年生の頃でした。

僕には両親が揃っていますが、兄弟の数が多く、父の収入だけでは兄弟全員に、学用品や制服、学校に履いて行く靴を買うことができません。友達の中には、学校に行くことをあきらめて、家族の畑を手伝う子もいますが、僕は学校に行きたかったので、MCLの奨学金に応募しました。

ミンダナオ子ども図書館に関する情報、2006年からの日々の活動報告など詳しくはウェブサイトのホームページを参照されると、より深くわかります。

検索：「ミンダナオ子ども図書館だより」
検索：「ミンダナオ子ども図書館：日記」

個人支援者のいない私たちの、支援者になってくださいわ！



Adznir S. Maliga
(2002年5月20日) 17歳
マギンダオ族
DWSM 高校5年生 (6年制)

それから8年間、サポートを続けていただけに感謝しています。とうとう、ジュニアハイスクールの最終学年まで進級することができました。僕の夢は、高校を卒業し、大学に行つて学校の先生になることです。そして、収入が得られるようになったら、今度は僕が弟や妹を高校や大学に行かせてあげたいです。生活が苦しい中でも、僕が高校に行くことを理解し、勉強を続けさせてくれる両親のためにも、まずは高校を卒業したいです。

こんにちは。僕の名前はアズミア。イスラム自治区マギンダオ州のパガロンガンにある、シティオ・ダマロンバンのアッパー・バゴエンゲドが僕の故郷です。マギンダオ族で、イスラム教を信仰しています。

両親は元気で、農業で生計を立てていますが、現金収入が少なく、収穫があった時しか家にお金がないので、家族の生活は楽ではありません。僕は、6人兄弟の長男なので、高校の授業がない時は、両親の畑仕事を手伝います。

僕がMCLの奨学生になったのは、2011年だったので、もう9年間もMCLから奨学金のサポートを受けています。奨学金のおかげで小学校を卒業し、ジュニアハイスクールも卒業できました。高校を卒業したら、大学に進学して、将来は学校の先生になりたいです。両親のように農業をしていても、生活が大変なので、専門的な仕事に就いて安定したお給料を得る生活をしたいです。そして、両親を助け、弟や妹たちも高校で学び、卒業させてあげたいです。

僕に学校に行くチャンスを下さった支援者の皆さま、本当にありがとうございます。高校の課題作成にお金がかかり、大変なことも多いですが、夢を叶えられるようにがんばります。



Samin A. Maliga
(2002年7月14日生) 17歳
マギンダオ族
ラジャムダ高校5年生 (6年制)

日本の皆さん、こんにちは。僕は、サミンといいます。アズミアと同じ、イスラム自治区マギンダオ州のパガロンガン出身です。僕の村は、サバカンのプリオクといえます。マギンダオ族で、イスラム教徒です。9人兄弟の4番目に生まれました。

僕の両親はお百姓です。収入が少なく子どもの数が多いので、食べていくだけでも必死ですが、家族みんなで助け合って生きています。

僕は、2012年にMCLの奨学生になりました。もし、奨学金のサポートがなければ、小学校さえ卒業できなかったかもしれません。この4月の、

ジュニアハイスクールの終了式とシニアハイスクールへの「ムービング・アップ」では、ここまで勉強を続けてこられたことに、自分自身のことですが、感動しました。もしかしたら、両親の方が僕より感動していたかもしれせん。

小さい頃からの僕の将来の夢は、学校を卒業することでした。そして今、ハイスクールを卒業することが、近い将来実現しようとしています。学校を卒業したら、いい仕事に就いて、家族を助けたいです。

特に、僕が学校に行くことを応援してくれた両親には、本当に感謝をしています。クラスメイトの中には、学校をあきらめて仕事をしている子もたくさんいるからです。

また、MCLの奨学金をサポートして下さっている日本の皆さまにも、大変感謝をいたしております。しっかり勉強して、これからのマギンダオの平和をつかっていきたいです。



奨学生の紹介、お問い合わせは、
メール mclmindanao@gmail.com
現地日本人スタッフ：宮木梓 (あずさ)
または、FAX：0743 74 6465 日本事務局 前田容子

Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも
はるかに美しいと感じるときだってある。
けれども、どうにもならないのが、たべられないときと、
お金が無くて学校に行けないとき、病気になるっても治せないとき・・・



ミンダナオ子ども図書館支援方法

- 1、医療や読み聞かせ等の活動全般にかかる経費と子供たちの生活費を支援・・・自由寄付**
直接下記の振替口座をお願いします。寄付をくださった方には隔月に機関誌『ミンダナオの風』と時には機関紙に代わってMCLで企画した絵本をお届けいたします。
自由寄付は、一番根幹になる寄付です。貧困集落に住んでいる子供たちの薬から手術に至るまでの医療費。まだ支援者が見つかっていないにも関わらず、放っておけず採用している100名ほどの奨学生達の学費。保護を必要として、MCL本部や下宿小屋に住み込んで学校に行かせている200名ほどの奨学生の生活費。ガソリン代を含む活動全般の諸経費に充てています。
機関誌を楽しみにしている方の場合、わずかな寄付でもお送りします。
他の方々に紹介していただければ幸いです。不要の方は、宮木梓か前田容子までご一報ください。
- 2、植林環境支援・・・6万円（ゴム、カカオの木600本、1ヘクタール、現地作業代こみ）**
洪水対策と先住民が土地を手放さないようにするための、経済自立支援です。
- 3、保育所建設支援・・・90万円（福祉局の要望によりスタンダードにしました）**
総コンクリート製をご希望の方は、130万円可能です。
開所式の参加や訪問も可能です。毎年チェックし、必要な場合は修理をしていきます。

スカラシップ支援

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、成績よりも孤児や片親、母子家庭や崩壊家庭の子、親がいても兄弟が多く学校にいけない子を採用の基準とし大学まで通えます。特に何らかの事情で保護を必要としている子は、本部や下宿に住み生活を保障（現在約200名）。支援には学費の他に、医療費、制服、学用品、小遣い、下宿代、生活費等が入っています。

- 1、大学生スカラシップ支援・・・年額70000円（月額5833円）**
- 2、高校生スカラシップ支援（日本の中高生）・・・年額60000円（月額5000円）**
- 3、里子支援（小学生）・・・年額40000円（月額3333円）**

スカラシップの場合は、振り込み用紙の通信欄に「大学」または「高校」「里子」等の希望を書いて振り込んでいただければ、現地スタッフの宮木梓よりお便りします。

その後、機関誌に同封して高校・大学生の場合は本人からの手紙（英語）、6月にスナップ写真、8月に成績表、12月にはクリスマスカードが届きます。プレゼントや文通も可能です。日本語の手紙は、現地で翻訳して当人に渡しています。小学生の里子の場合は、まだ字を読んだり書けない子も多く絵手紙での返事ですが、プレゼントは可能で届けます。

事前の紹介や希望、訪問などのご相談は、メールで現地スタッフの宮木梓（あずさ）さんか、FAXで日本事務局の前田容子さんに！訪問の際は、ダバオ空港にお迎えに行き、MCLに宿泊していただき、奨学生の自宅にもご案内します。宿泊費はとりません。

奨学生の紹介、現地訪問、機関誌停止その他に関するお問い合わせは、

メール mclmindanao@gmail.com 現地日本人スタッフ：宮木梓（あずさ）

FAX： 0743 74 6465 日本事務局 前田容子

**詳しくはウェブサイト参照 検索：「ミンダナオ子ども図書館だより」
または、「ミンダナオ子ども図書館日記」から「支援方法」をクリック！**

ゆうちょ振り込み口座 00100-0-18057：加入者名『ミンダナオ子ども図書館』

（銀行振込、ネットバンキングも可能です） ■銀行名 ゆうちょ銀行 ■金融機関コード 9900
■店番 019 ■預金種目 当座 ■店名 ○一九店（ゼロイチキユウ店） ■口座番号 0018057

子どもたちの日本公演や松居友、エープリルリン、宮木梓などの講演会、報告会、家庭集会にお声がけください。
講演や家庭集会の設定も、輪を広げていくための、大きな支援のひとつです。

メール： mclmindanao@gmail.com（宮木梓） mcltomo@gmail.com（松居友）

現地住所：Mindanao Children's Library Foundation, Inc.
Brgy. Manongol Kidapawan City North Cotabato 9400 Philippines